

# 育児と育自のむずかしさ



## 原田美由紀

関西大学化学生命工学部化学・物質工学科  
[564-8680] 吹田市山手町3-3-35  
准教授, 博士(工学).  
専門は高分子材料化学.  
mharada@kansai-u.ac.jp  
www.chemmater.kansai-u.ac.jp/Poly4/

仕事と私事の原因執筆をご依頼いただいたときに、  
どういう内容を書けばよいのか正直迷ったのだが、筆  
者自身はこれまでほかの人から聞いた経験談が最も参  
考になったので、纏まりのない文章になるかもしれな  
いが、「これまでの経験」を中心に述べたいと思う。

筆者は、現在5歳と2歳になったばかりの一男一女の  
母親であるが、結婚してから5年間ほどは夫婦二人だ  
けだったので、各自のペースで仕事をし、余った時間  
を共有する形で生活していた。夫が長期出張で、1ヶ月  
近く顔を合わせないという状況もとくに問題にならな  
かった。独身時には結婚によって生活が大きく変わる  
ような、勝手なイメージがあった筆者にとっては大変  
意外だったが、それなりに満足する生活を楽しんでいた。

ところが、第一子を妊娠したことで筆者の生活は一  
変することになる。初めての経験に、妊婦生活からお  
おいに戸惑った。産婦人科の先生からは健康的に出産  
をしたければ、生活リズムを根本的に変えるよう強く  
指導された。夕食は19時まで、就寝は22時、睡眠時間  
は8時間以上。これまで21～22時頃に夕食をとって  
いたのだから、無理な要求をされるものだと面食らっ  
た感が強かったが、規則正しい生活のおかげか、大き  
くなったお腹もあまり負担に感じず、出産1ヶ月前まで  
それなりに順調に仕事もできた。出産に対する心配は  
あったものの、この調子ならちょっと出産して、すぐ  
に仕事に戻れると勝手に思い込んでいた。出産後、筆  
者のこの甘すぎる考えは一瞬にして打ち砕かれた。人  
一人育てることの忙しさと大変さは、想像をはるかに  
超えるものだった。運悪く夫の海外出張が頻発し、息  
子との対面も生まれてから2週間後だったり、母親  
初心者の筆者と息子の二人きりの生活が長期に続いて、  
精神的にまいったことを覚えている。

運良く、生後6ヶ月から保育園に入園し仕事を再開  
できたことで、家に籠もりきりの状態よりも、精神的  
ストレスは低減したが、さまざまな病気をもらって  
くるという保育園の洗礼があり、37.5℃を超えたとの電  
話連絡で仕事を中断することもたびたびあった。非常  
に中途半端な仕事の仕方になり、周りの先生方におお  
いに迷惑をかけることとなったし、自分の思いどおり

に仕事に時間を使えない状況に現在も苦悩している。  
しかし、夕方保育園に迎えに行ったときに嬉しそうに  
飛びついてくる子供たちの笑顔を見ると、蓄積した疲  
れが吹っ飛ぶことはないが、おおいに癒やされて明日  
も頑張ろうと思えてくるのである。

このように、育児をする母親（もちろん父親も）に共  
通の、毎日を闘うという言葉がぴったりの生活を送り、  
ご多分にもれず、出産してから今日まで休日というも  
のではない。子どもの年齢に応じて、そして兄妹ができ  
るにつれ、悩みの種類は変わっていくのだが、見事な  
ほどに毎日毎日次から次へと問題が湧き出てくる。気  
力・体力・時にあきらめ(?)がなければ、とてもやっ  
てこられなかったと思う。さらに追い打ちをかけるよ  
うに、一年前からは夫は横浜で単身赴任となった。子  
どもたちは寂しい思いもしているようだが、第二子出  
産時には1ヶ月間育休をとってくれ、今でもほぼ毎週  
末欠かさず帰宅してくれる夫にとっても感謝している。  
以前は、安易に人に頼ってはいけないと思い込んでい  
たが、物理的にやれないことは仕方ないと考えを改め、  
最近では義母の助けを借りることも覚えた。子どもた  
ちも祖母が家に泊まりに来てくれることを楽しみにし  
てくれるようになり、結果的には良かったと思う。

話は変わるが、筆者は現在、大学の男女共同参画委  
員会の委員として大学および附属校の委員の方々と議  
論・提案する機会がある。筆者自身、産休・育休を取  
得しようにも、具体的にどうすればよいのかわからな  
かった経験がある（出産を考え始めた段階で、大学の利用  
可能な制度について詳細な情報が欲しかったのだが、  
その立場になる前に問い合わせをすることには、非常  
に大きな壁を感じて断念した）。現在は、大学HPに情  
報提供されるようになり、制度についての説明会など  
も開かれるようになったことで若干は進歩しつつある。  
これから制度を利用する方々にとって少しでも助けに  
なれば嬉しい。

最後に、タイトルにも書いたように育児とはまさに  
育自である。自分の未熟さを日々痛感するが、二つの  
得難い宝と未経験の新しい世界を与えてもらったこと  
に日々感謝し、踏ん張っていきたいところである。